

トルストイと『リア王』

—断片—

本多 顕 彰

トルストイのシェイクスピア論は、どんなすぐれた文学者でも偏見をもつてのぞむと、鑑賞を誤まるということを証する顕著な実例である。近頃は外国文学研究者の中に心に物差を用意して持ち、作品をそれでもって裁断する傾向が目立っているが、一見、切れ味の鮮かさを見せるけれども、真の文学研究ではない。

トルストイも、不思議にシェイクスピアに対するととなると、たちまち激しい偏見をいただき、何の躊躇するところもなく、大胆に斬って捨てる。彼のシェイクスピア論は、ほとんど『リア王』論に終始しているが、これを徹頭徹尾不自然な駄作ときめつけている。

彼がそうきめつけた理由は、大体次の六つであるようだ。

1. リアと娘たち、グロースタと息子たちの関係は、でたらめで、人物の性格から出たものではないし、また事件の自然の推移から生じたものでもない。例えば、いくら変装していても、常に身边を離れないでいるケントをリアが見破らないということも、また、盲目になったグロースタが吾が子に手を引かれながら見破らず、平地で跳んで、断崖を跳び降りたと信じるなどにはありえないことだ。

2. リア王の実際の話は紀元前800年頃のことなのに、劇では、中世以外にはありそうにない人物が出てくるのは、時代錯誤も甚だしく、興味を失わないでついて行くことは不可能である。

3. 不自然さは、また、行動や言語の誇張がはなはだしい点にもあらわれている。誇張は印象を強めるどころか、反って弱めてしまう。そのため、この劇は、恐怖や憐愍を感じさせる代りに、人をふき出させてしまう。

4. 人物各自の性格に相応した言語のスタイルが欠けている。登場人物はすべて自分自身の言葉を使わずに、いつも一律の、大袈裟な、不自然な言葉で話す。

5. 生きた人間の口から出そうにない言葉が人物の口から出る。たとえば、

リアが、もしも娘のリーガンが自分を引き取ってくれなければ、墓の中の妻を離縁するだの、わめいて天をくだいてやろうだの、風が陸を海の中へ吹き込めだの、というのがそれである。

6. 言語に節制が全然ない。恋する者も、瀕死の者も、戦いつつある者も、誰もかれも一様におしゃべりで、その場合に不似合なことを突然べらべらしゃべる。

シェイクスピアの作品なら、何でも最高にほめ上げようとするロマンチックな、もしくは愛国的なイギリスの批評家はもとよりのこと、シェイクスピア愛好家にとっては、これは全く驚くべき独断に思われたであろう。それを述べた人が文学史上第一級の小説家であったせい、または、あまりにも突飛な意見で反駁の値打ちなしと見たせい、正面きっての反論は、まだ現われていないようである。

しかし、われわれ日本人の中には、内心トルストイに同感する人もいるのではないかと思う。リアの激しい感情の嵐や、時には野卑で粗暴となる誇張した言葉は、日本人の感覚には不協和音である。われわれは、あのような激情に身をまかせ切ることあまりないし、いかに激情のとりこになったとしても、あのように突拍子もないことを言うことは少い。

けれども、それかといって、トルストイの意見に全面的に賛成するわけにはいかない。一概にはいえないが、シェイクスピアはロマンチックな劇作家であり、トルストイはリアリストである。トルストイが『リア王』のロマンチックな假定、すなわち、年老いた国王が余生を安楽にすごすために国を三人の娘に分ち与える気になったとすれば、そしてまた、分ち与えるに際して、娘たちから快い愛情の表現を期待したとするならば、という假定を、ばかばかしいとして受容れなかったことが、彼の酷評の発端である。假定が気に入らなければ、その假定の下に起るとされることは全部気に入らない。

それに、シェイクスピアと、芸術論やシェイクスピア論を書いた頃のトルストイとでは、芸術に対する態度が全然ちがう。シェイクスピアは、ハムレットのセリフのように、芝居(芸術)は「自然に向って鏡をかかげるようなものだ」と考えている。芸術の鏡は、人生や自然の、善いものも悪いものも、美しいものも醜いものも、公平に映す。そこからモラルを引き出すことを、彼は観衆に一任する。それがドラマというものである。ところが『芸術論』以後のトルストイは、真(善)を芸術の目的とし、真が最終の勝利を得、虚偽がついに亡び

ることを芸術において示そうとした。「復讐は我にあり、われこれに報いん」という『アンナ・カレエニナ』のモットーは、彼の他の作品にも通用する。

それゆえ、美しく善良なコーデリアが、劇の終りのところで、獄中で、しかも悪漢の手によって絞殺されるなどということは、トルストイには堪えられないことであった。心のやさしい人が、様々の不幸にもめげず、正しく生きて、ついに最後の勝利を得るといふ筋の小説を書いたディケンズは、トルストイの見たところでは、世界文学史上最高の作家であった。

立場のちがい、思想のちがいから、トルストイは始めから偏見をもって読んだから、文学者としてはめずらしい読みちがいをしてしまった。しかし、それはそれとして、作品を虚心で読むことは、ひじょうにむずかしいことで、トルストイのような極端な偏見ではなくても、人は偏見なしでは読むことができない。そのことを思い、われわれは、トルストイの過ちを他山の石としなければならない。

トルストイは、大きな展望においても誤ったが、細部においても誤った。例えば、劇の終りで、死骸となったコーデリアがかつぎこまれてくると、リアの心の悲痛が肉体的なものになり、肉体の胸が破裂しそうになったのであろう。彼は、こうつぶやく、

Pray you, undo this button.

彼は「どうか、ボタンをはずしてくれ」と頼み、はずしてもらうと「ありがとう」と言い、あと二言三言つぶやくと、そのまま息を引きとる。シェイクスピアの劇のうち、この言葉ほど深い悲しみを伝える言葉はない。ところが、トルストイは、これを「たわごと」と評している。偏見が彼の審美眼を曇らせてしまったのである。

また、リアが娘たちから追払われて悲痛のどん底に沈み、自ら発狂するかと思うところがある。

You heavens, give me that patience, patience I need!

You see me here, you gods, a poor old man,

As full of grief as age; wretched in both!

If it be you that stirs these daughters' hearts

Against their father, fool me not so much

To bear it tamely;.....

.....

You think I'll weep;

No, I'll not weep:

I have full cause of weeping; but this heart
Shall break into a hundred thousand flaws,
Or ere I'll weep. O, Fool! I shall go mad!

II. iv. 274 ff.

われわれはリアのあわれさに深く同情するが、トルストイは、これを「途方もなくばかげた、不自然この上ないセリフで、主題には何の関係もない」と評している。驚くべき無理解である。